

すくいのかめ



mikatuki98

すくいのかめ

ある日のこと。 どうも自分の心の重くて暗い部分が生んでしまったと思われる、得体の知れないヘンテコな形をした怪獣を連れて、何処か知らない道をトボトボと歩いていた。

怪獣を連れて、と言っても仲良く手をつないで一緒に並んで歩いている訳ではない。 連れの怪獣はとにかく黒っぽくて大きい。 そいつのせいで足取りはたまらなく重く、気分は当然のように優れない。 どんよりと静かに優れない。

「ハア……」

大きくため息をつく、歩みをやめてその場に立ち止まってしまった。 もちろん、ヘンテコな怪獣もピツタリと寄り添っている。 何処までも着いて来るやつ。 だからって追っ払う元気もない。 何だかもうこれ以上動けない気がしていた。

そこへ突然、誰かが話しかけてきた。

「きみってウミガメが好きでしょ？」

「え？」

驚きながら声のする方を見ると、そこにはちょうどその背中に乗れるくらいの大きなウミガメが居てコッチを見ていた。

「う・うん」

ちょっと驚きながらも、本当にウミガメが大好きなので大きく頷いた。 するとウミガメは自分の身体をゆっくりと披露し始めた。

まずは美しい甲羅の模様。 次に鳥のように海の中で自由に泳ぐ為の両ヒレ。 そうして角度を少しずつ変えながら全身の姿を見せてゆく。 それまでテレビや写真でしか観たことが無かったから、目の前に展開されるウミガメの姿は感動の一言だ。

「こんな風にね」

そう言いながら、今度は海中を泳ぐ恰好をその場で見せてくれた。 ひらり、ひらり。 大きなヒレがまるで羽のようだ。

「わあ～～～スゴいなあ～～～」

無邪気に喜びの声を上げる。 海の中なのかどうかなんて気にならない。 すっかりウミガメの姿に見とれていた。

はてさて一体どれくらいの時間、ウミガメの姿に酔いしれていたんだろう？ ふいにテンヘコな怪獣のことを思い出して後ろを振り返った。 すると、いつの間にかそいつの体はちいちゃくなり、顔はと言うと何だかスゴク困った表情になっていた。

『あれ？こいつ、むずむずして変だぞ。 ウミガメの登場に何かタジタジだぞ。 あっ！ウミガメが好きだと言ったから、一緒に居られなくなってしまったんだな。 こんなにちいちゃくなっちゃって…… おおおおお！ 後退りしながら離れてゆくぞお～ バイバーイ』

とうとうヘンテコな怪獣は側から居なくなってしまった。 と同時に目覚めたので、全てが夢だったことに気がついた。

しかし不思議と身体もスッキリして気分も爽やかだ。 ウミガメの声も耳元に残っている。

アニメの主人公のような可愛い少年の声。

「キミって、ウミガメが好きでしょ？ キミって、ウミガメが好きでしょ？」

つい笑顔で何度も何度も、ウミガメの声を真似てみた。そしてもう一度ニッコリとほほ笑むと、自分で大きな声で返事をしていた。

「うん、大好き！」 了